

東日本大震災以降、求められたすべての要請に可能な限り応じる、という対応をしていたため、私の上野村の畑は、春になっても放棄された状態が続いていた。それは私にとってはひどく気になることであった。作物ができないだけなら問題はない。そもそもこの数年はほとんどがイノシシやシカ、サルなどの餌になっていて、まるで動物たちの食べ物づくりのような状態になっていた。できなくたって、村の人たちにもらえばそれですむことでもある。

ところが畑が耕されないのはやはりまずいのである。なぜならいつまでも畑が放置されていると、畑の横の道を通りかかった村人が心配する。体を悪くしているのではないかとか、ひょっとしたら村の暮らしに飽きてしまったのではないかとか。春に畑をきれいにしておくことは、今年も元気で村で暮らします、という看板を掲げることも意味しているのである。やはりこの看板だけは出さないとまずい。

ゴールデンウィークに、およそ一月遅れで畑はきれいになった。応援団を入れて、一気に春の作付けを終えた。ようやく私ものんびりした気分になった。

東日本大震災を契機にして、私は日本は変わっていくではないかと思っている。実際にはこの二、三十年の間に、日本の社会は変わり始めていたのである。かつてのような、田舎は遅れたところ、都市はすすんだところという観念はすっかりなくなっている。農林漁業などの将来を、たとえピントの外れたものも数多くあるとしても、多くの人たちが考えるようになった。以前なら自然では飯は食えないなどといっている人がずいぶんいたものだが、今日では自然なくして社会の未来はないということが合意になってきている。経済発展だけでは人間は幸せになれないということも、いまでは共通の思いになっている。

すべてを個人を基盤にして考えるという発想もずいぶん弱くなった。今日ではコミュニティの再建とか共同体の再創造という言葉のほうが、未来に向けた言葉としてはふさわしくなっている。支え合う社会をつくりたいという思いは、コミュニティの創造を探る動きだけでなく、ボランティア型社会もつくりだしていった。

このような変化がゆっくりとすすんだ二、三十年をへて、東日本大震災は起こった。今回の大災害は、一方ではこれらの動きを加速させるだろう。だが他方ではすべてを経済発展に還元して考える人々の巻き返しの動きも、高まっていくことだろう。経済的指標をとおして物事を考えてきた人たちにとっては、それ以外の思考法はないからである。

そんなことをとおして、次のようなことが問われていくに違いない。それは社会を数字でとらえるのか、数字以外の指標でとらえるのかということである。

数字でとらえれば、経済発展がとまることは恐怖であり、今日のように節電をしなければならないことさえ恐怖である。節電によって市場の力が弱まり、生産力が低下すれば、企業の利益が減少し、設備投資なども行われなくなる。そうすれば雇用力も低下し、利益を出すために工場の海外移転がすすめばますます雇用力が低下し、国内市場を低下させる。数字だけで物事を考えれば、みえてくるのはこのような姿である。それは衰弱の道でしかない。

ところがこのような思考が、生産額が大きい農林漁業などを軽視させ、とりわけ数値的な価値を示さない自然を無視させてきたのである。コミュニティや共同体も数値的な価値を表すものではない。

こうして数値的に表現できる価値を追い求めれば追い求めるほど、その価値を数値的に表現できないものを無視させ、それらを壊していつてしまった。そしてこの問題点が少しずつわかりはじめたがゆえに、数字では表せないもののなかに大事なものがあつたのではないかと思う人たちが、次第に増加していった。

おそらく復旧、復興の過程も、このふたつの思考の対立のなかで展開していくことになるだろう。数字で考える人たちは、生産力や市場の回復に復旧の姿を見ていくことになるだろう。数字で表された「発展する日本」を目指すことになるだろう。だが数字がすべてではないと考える人たちは、人と自然が結び合い、人と人が結び合う、さらには都市と農村漁村が結び合いながら、誰もが誇りをもって生きられる社会が生まれていくことのなかに、復興への道があると考えているだろう。被災地の復興は、日本の社会の作り直しとともに展開されなければならないと。

これまでの古いモデルでいくのか、それとも新しい社会モデルを模索しながら復興への道を探るのか。それがこれから問われていくことになる。